伊藤整

日本文壇史

反自然主義の人たち

14

講談社

日本文壇史 XIV

昭和四十七年一月二十八日 第一刷發行
昭和 五十 年八月 四 日 第二刷發行

©伊藤貞子 一九七二

著者 伊藤整
東京都文京區音羽二-一二-二一
發行者 野間省一
長野市西和田四七〇
印刷者 兒玉幸男
長野市西和田四七〇
印刷所 信毎書籍印刷株式會社
(黒柳製本)

東京都文京區音羽二-一二-二一
發行所 株式會社 講談社
振替口座 東京三九三〇
電話 東京(945)一一一一(大代表)
郵便番号 一一三

定價は帯に表示してあります。 Printed in Japan (文1)

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

讀者に　瀬沼茂樹
參考文獻
索引

裝幀　構成　岡本芳雄

寫眞

* 石川啄木　金田一京助　佐藤北江　當時の東京朝日新聞社
* 二葉亭四迷のロシア國會入場證　遺書と賀茂丸船上での日記　二葉亭四迷終焉の碑
* 小栗風葉と妻籌子　「金色夜叉終篇」冒頭　眞山青果
* 佐藤義亮　中村武羅夫　佐藤紅綠　「新潮」創刊號
* 北原白秋　「邪宗門」　三木露風　「廢園」　川路柳虹
* 後藤宙外、小杉天外、水谷不倒、伊原青々園、島村抱月　姉崎嘲風　笹川臨風　登張竹風
* 森鷗外　「スバル」第七號掲載の「キタ・セクスアリス」「魔睡」掲載の「スバル」第六號
* 幸田露伴　狩野亨吉　厨川白村　內藤湖南　上田敏
* 岩野泡鳴　「耽溺」「中央公論」掲載の「岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず」
* 田山花袋と妻利佐子　「田舍教師」　太田玉茗　小林秀三と秀三の日記の一部

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第一章……二
明治四十二年、石川啄木の窮狀——佐藤北江と啄木——啄木「朝日」に入社す——「鳥影」出版計劃の挫折

第二章……三
長谷川二葉亭四迷のロシア生活——二葉亭發病す——二葉亭歸路に

第三章……四六
つく——ベンガル灣の船中に死す——二葉亭の遺書と葬儀——澁川玄耳が露都の二葉亭舊居を訪ふ
新聲社の歴史——佐藤紅綠作家となる——風葉の作風の變化——齋藤野の人——風葉の苦惱——風葉の妻籌子——「金色夜叉終篇」の成立——風葉と眞山青果の袂別——風葉が東京を去る
第四章……七七
「邪宗門」の出版——早稲田詩社と詩草社——言文一致體の詩の發生——自由詩社の人々——三木露風が第二詩集「廢園」を刊行する

第五章……一〇三
森鷗外と文藝院——文藝院設立の噂と文士の反應——山川登美子の死——反自然主義派の人々——後藤宙外と文藝革新會

第六章……一二三
鷗外の「魔睡」が出る——「キタ・セクスアリス」が「スバル」に發表さる——文學博士の贈位と「キタ・セクスアリス」の發禁

第七章……一四六
幸田露伴と內藤湖南——露伴と京都の若い文學者たち——上田敏——田村松魚と佐藤俊子の結婚——露伴が京大を辭任する——露伴

第八章 ……一六九
が東京に歸る
樺太——北海道——泡鳴の日高旅行——增田しも江札幌に來る——伊藤博文の死——泡鳴の演說——泡鳴としも江が心中を企る——泡鳴がしも江と別れる——泡鳴東京に戻る
第九章 ……二二四
花袋と岡田美知代——花袋と飯田代子——太田玉茗——美知代の出產——主婦としての美知代——水野仙子——「田舍教師」の成立——永代靜雄と岡田美知代の決裂

日本文壇史

——反自然主義の人たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

明治四十二年、石川啄木の窮狀――佐藤北江と啄木――啄木「朝日」に入社す――「鳥影」出版計劃の挫折

1

石川啄木は明治四十二年（一九〇九年）の一月の末、その擔當する「スバル」第二號の編輯に當つて、短歌欄を虐待したといふことで平野萬里を怒らせた。啄木は、平野萬里が力を入れてゐる舊「明星」的な短歌がこの雜誌にあとを引くことを嫌つたのである。平野は、もともとこの雜誌は、自分が平出修を說きつけて出資させたのだといふ考へであり、自分の雜誌だと思つてゐた。彼は啄木を「スバル」から追放しようと思ひ、二月のはじめ、このあと三號、四號、五號は原稿があまつてゐるから、君は執筆しないでくれ、と啄木に葉書を送つた。すると啄木はすぐに出資者の平出修を訪ねて、平野のハガキは平出の同意を得たものでないことを確かめた。彼は「明星」的要素を「スバル」から除くべきだといふ議論をして、平出の同意を得た。そして彼はすぐ平野萬里あてに、反

駁の手紙を出した。すると今度は平野が平出を訪ねて、啄木のことを探り出し、啄木に返事を出した。それは君が「スバル」をやりたければ勝手にやるがいい。しかし「男子はすべからく男らしくやりたきものに候」と、嘲るやうな言葉を最後に述べたものであつた。

啄木は編輯方針の爭ひをして一應は勝つたのである。萬里平野久保は、前年の明治四十一年の六月、東大の工科大學應用化學科を卒業した工學士である。卒業後半年あまり「スバル」創刊のことにかかづらはつて就職しなかつたが、ちやうどこの頃、横濱のある硝子會社に勤めることになり、勤務の關係で近く東京を去らねばならなくなつてゐた。彼は「スバル」の編輯のことでいつまでも啄木と爭つてゐるわけにはいかなかつた。

石川啄木の方も、「スバル」の發行名義人になつてはゐるものの、そこから收入があるわけではなかつた。編輯實務は一卷ごとに交替するきまりであり、第三號は太田正雄が擔當することになつた。啄木は前年の十一月から十二月にかけて「毎日新聞」に「鳥影」を載せてゐた間は、どうにか生活を支へることができたが、一月になつてから、ほとんど收入がなかつた。二月になると、下宿蓋平館は、前々からの殘りもあり、うるさく下宿料の催促をして來た。もうこの上金田一京助に賴ることもできなかつた。何とかして金を作らねばならない、と啄木は思つた。

心あたりの一つは新聞小說の「鳥影」を單行本にして出すことであつた。二月二日、下宿料の催

促を受けるとすぐ、彼は「鳥影」の切り抜きを持つて、物理學校の裏手に當る牛込區神樂坂二丁目二十二番地の北原白秋のところへ相談に出かけた。啄木の話を聞くと白秋は、鈴木鼓村にたのんで、どこかの本屋に交渉してやる、と言つた。箏曲家の鈴木鼓村は交際が廣く、色々な傳手のある人間であつた。「鳥影」を出版するにしてもその印税は、すぐ當てにできることではないので、何か別な方策も講じなければならなかつた。

啄木は「朝日新聞」の編輯局の重要な人物なる佐藤北江が岩手縣の出身者だといふことを聞いてゐた。「東京朝日」の編輯局では、池邊三山が主筆として全體を總括してゐたが、その下に二人の編輯責任者を置いてゐた。北江佐藤眞一は晝間編輯長であり、安藤正純が夜間編輯長であつた。啄木は佐藤北江に何の縁もなかつたが、その北江なる筆名は、北上川への鄕愁を抱いた文人を想像させた。また盛岡中學の古い卒業生なる佐藤北江が異常な秀才であつたといふ傳説も聞いてゐた。

その佐藤北江に就職依頼の手紙を書くことを、啄木は苦しまぎれに考へついた。二月のはじめ、啄木は同宿の金田一京助に一通の手紙を示した。それは「小生は別紙履歴書所載の如きものに有之候。御社ではかやうなものを使つて下さりまじく候や。但し小生は生活のため月三十金を必要とするものに有之候也」といふ極めて簡單なものであつた。

金田一京助はそれを讀んで、これではいやに角張つた文面で、賴むのやら言ひつけるのやら、請

求書みたいな、そんな頼み狀つてあるかなあ。そんなことを言つてやつたつて、うまく出來ようとは思へないがなあ、と言つた。すると啄木は、出來なくつたつて元々だ。それより惡くはなりつこない。なあに、出して見る。三錢切手一枚ありませんか、と言つた。そしてその手紙の外に、盛岡中學の中途退學生なること、「明星」のこと、詩集「あこがれ」出版のこと、小學校教師を經て、札幌、小樽、釧路等で新聞社に勤めたこと、「スバル」の同人であること等を書いた履歴書を同封して「朝日新聞」に送つた。別に「スバル」を一册送つた。それは二月三日のことであつた。

二日ほどして佐藤北江から返事が來た。逢つて話したい、とのことであつた。啄木は金田一京助の袴を借りて二月六日に、銀座の「朝日新聞」社へ出かけた。その日は佐藤は急がしいとのことで、翌日彼はまた出かけた。「朝日新聞」社は銀座の瀧山町にあつた。數寄屋橋から新橋に向つて行く左側である。煉瓦造り二階建で、本屋は間口十二間、奥行四間の瓦葺きの建物であつた。編輯部は別棟で間口六間、奥行二間半の煉瓦作り二階建てであつた。

そこの二階で石川啄木は初めて佐藤北江に逢つた。このとき石川啄木は數へ年二十四歳であり、佐藤北江は數へ年四十二歳であつた。啄木の見た北江は中脊の、色の白い、そしてやや赤味がかつた髭を生やした武骨な感じの男であつた。三分ばかり話してゐるうちに、佐藤は、三十圓で勤めたいのなら、そのつもりで運動してみよう、と啄木に約束した。見込みがありさうであつた。

啄木はその日も下宿屋からきびしい催促を受けてゐた。下宿ではこの頃啄木に食事を出さなくなつてゐた。この日啄木は下宿に歸つて金田一に「朝日新聞」のことを報告をし、また金の相談をした。金田一はフロックコートやその他の衣類を出して啄木を質屋に持つて行かせた。それで二十一圓金を作つたが、そのうちから、また啄木は六圓を借りた。啄木はこの頃、前年の六月に春陽堂の「新小説」に持ち込んでゐた小説「病院の窓」を思ひ出して、春陽堂にかけ合つてゐた。「病院の窓」は「中央公論」に持ち込んで斷られた作品で、その後鷗外のところへ持つて行き、その傳手で「新小説」に送られたものであつた。去年の夏、啄木が苦しまぎれに何度かその稿料の前借を申し込んだが、掲載前は拂へないとのことで、そのままになつてゐたのであつた。

佐藤北江に逢つた翌日なる二月八日、啄木は十時頃に起き、下宿では朝食も出さないので、そのまま出て日本橋の春陽堂へ行つた。彼は昨日も「朝日」へ行く前に春陽堂へ寄つたが、日曜日で店が閉まつてゐたのだつた。この日は編輯部員で小説や雜文も書く本多嘯月に逢ふことができた。そこで彼は一時間ほどねばつて本多と話し合つた結果、原稿料として二十二圓七十五錢を手に入れることが出來た。それは一枚二十五錢といふ安い稿料であつたが、啄木の下宿料は食事と間代を含めて月十二圓であるから、彼にとつては大金であつた。金を手にすると、彼は忽ち氣分が變り、生活上の困難が全部解決したやうな氣持になつた。その足ですぐ彼は神樂坂の北原白秋を訪ね、そのこ

とを傳へて一緒に喜び合つた。北原は、「鳥影」の出版のことを依頼してある鈴木鼓村の家に啄木を連れて行つた。鼓村の家は麴町區永田町二ノ二十七で、蒲原有明の家に近い屋敷町にあつた。鼓村は惠比壽樣を大きくふくらましたやうな巨大漢で、話相手としては面白い人物であつた。そこで啄木と白秋は四時間ほど遊んでゐた。その間に鼓村は蕎麥をとつてくれた。啄木は朝食も晝食も拔いてゐたので、それがその日の初めての食事であつた。

夕方になると啄木は白秋を連れて淺草に行き、十二階の近くの、前に行つたことのある新松綠といふ店で酒を飲んだ。啄木は前年の十一月頃、「毎日新聞」の稿料が入るのをあてにしてこの十二階下で、色々な女を買つた。そして彼は、つや子とすみ子といふ二人の女を知つたが、そのすみ子といふのが、植木貞子の妹であることが分つた。植木貞子は、去年の春啄木が上京して間もなく再會したところの、明治三十八年四月の新詩社の演劇會に出演してゐた少女である。三年後の去年、貞子は十九歳になつてゐた。啄木は赤心館で貞子に何度か逢つてゐるうちに關係が出來たが、その後貞子があまりしつこく彼を追ひ求めるので、やがてつれなく扱ふやうになつた。八月の九日、貞子は啄木の留守にやつて來て、腹立ちまぎれに啄木の日記や小說の原稿を持ち去つたのがきつかけで、啄木と爭ひになり、何度か交涉した結果、八月の十九日にその日記と原稿とを返却した。それつきり啄木は貞子と別れたのだが、偶然に十二階下で逢つたすみ子といふ女が貞子の妹であるこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com